

2024年度 地域連携活動助成金 活動成果報告書

1 活動概要

活動団体名	川島高峰問題分析ゼミナール・問題解決ゼミナール
活動テーマ	新潟県における観光圏実装化に向けた 外部Z世代による関係人口の地域との協創活動
活動期間	2024年4月11日 ～ 2025年3月31日
主な活動場所	新潟県南魚沼市・佐渡市・津南町

連携地域 連携団体等	〔南魚沼市〕 南魚沼市役所総務部／教育委員会・学校教育課学校指導係長 一般社団法人 愛・南魚沼みらい塾 理事・倉田智浩 一般社団法人 南魚沼市まちづくり推進機構 株式会社エフエム雪国 一般社団法人 雪国観光圏 ぬまめん(地域インフルエンサー) (株)八海山 青木酒造(株) 株式会社レルヒ (ぽんしゅ館 [新潟県地酒販売促進事業体]) 〔津南町〕 津南町役場総務課／観光地域づくり課 三箇地区都会との交流を進める会 リクルートじゃらんリサーチセンター 一般社団法人 雪国観光圏 〔佐渡市〕 佐渡市地域産業振興課地域支援係／羽茂支所 佐渡観光交流機構 羽茂農業振興公社 J A 佐渡 (株)北雪酒造 さどやニッポン
活動者数	24名 ※ 活動に参加した本大学の教職員及び学生の人数を入力してください。

2 活動内容 ※活動内容や活動成果は地域連携センターHP等で公表します。

活動目的（地域が抱える課題との関係や活動により期待される効果等、本活動が地域の課題解決や活性化につながる事が分かるように記入してください。）

川島ゼミナールでは長らく関係人口、交流人口政策の実践的な実習活動（地域活性化／地方創生）に取り組んできた。これについては「過年度の活動実績」をご参照いただければ幸いである。本取り組みでは「新潟県における観光圏実装化に向けた外部Z世代による関係人口の地域との協創活動」を取組理念の主題としたが、「外部Z世代による関係人口」、「観光圏実装化」、「地域との協創活動」が目的の3大キーワードである。これについて以下に説明する。

1 「外部Z世代による関係人口」

観光庁を主管とする観光圏整備法による新潟県内の二つの観光圏「雪国観光圏」並びに「トキめき佐渡・にいがた観光圏」で、後述する「次年度以降の継続性における目的」を視野に入れつつ2025年度は三つの活動拠点で取り組みを進める。なお3拠点の活動となるが、これは過年度からの継続性に加え、所属ゼミ生の出自に端を発した学生の自発的な故郷創生への意思によるものである。また、観光圏の意味と二つの観光圏における取組の目的は「次年度以降の継続性」にて後述する。

①「雪国観光圏」については、同観光圏内では塩沢トンネル群（越後湯沢～塩沢間）の北側で首都圏からの恵まれた公共交通の拠点（2つの新幹線停車駅・3つの関越自動車道IC）を持ち、同観光圏内の道路・鉄道網のハブである南魚沼市、並びに同観光圏では奥座敷をなし知名度で劣位な津南町での活動を行う。

②「トキめき佐渡・にいがた観光圏」の佐渡市は、新潟県を渡航拠点、もしくは経由観光地とする奥座敷の観光立地にあり、首都圏からの集客は新潟市一両津航路が中心となり、南佐渡観光の集客を支える直江津－小木航路は減便を余儀なくされ不利な状況にある。この直江津からの発着港を擁す南佐渡の小木・羽茂集落地域での活動を行う。

各班の「地域課題との関係性及びその期待される効果」

次に、南魚沼市、津南町、佐渡市における活動における「地域課題との関係性及びその期待される効果」について説明する。

南魚沼班

南魚沼班での活動は、過去からの継続案件と、新規案件の二つからなる。

南魚沼市の継続案件は、過年度の活動をつうじて南魚沼・音楽班は学生自らが考案、製作した南魚沼の地酒の酒瓶を利活用した楽器「酔音」があった。これについて、本年3月、実用新案登録3245918号「酒瓶の楽器とすりこぎ棒のばち 新案権者・川島高峰、考案者・音楽班各ゼミ員」*特許書添付、参照 酒瓶楽士(Sakabinist) <https://www.instagram.com/sakabinist/>)

並びに「酒瓶楽師」等につき**商標権**も取得し、これにより**著作権上、ディフェンシブに活動を展開できる態勢**となった。

この酒瓶楽器の演奏活動やビジュアルな情報発信、地域の公教育機関を通じた郷土教育・地方人材教育を実施するとともに、南魚沼地区の日本酒文化とツーリズムについて首都圏の若者世代との交流人口の拡大とインバウンド拡大に務める。

南魚沼市の新規案件として実施するのは**南魚沼市の移住媒体のメタ宣伝（宣伝の宣伝）**である。同市では『LIFEin』（<https://life-in.jp/>）という移住促進媒体を2014年より刊行（紙媒体及びweb媒体として）してきた。実際の移住者の声を秀逸なビジュアルとともに伝えている媒体である。本年はこれについて地方移住を視野に入れ活動してきた学生より以下の提案を受け、これを活動方針とすることとした。

近年、「おてつたび」（<https://otetsutabi.com/>）等に代表されるような短期のワーキング・ホリデー型のツーリズム（旅客業等での短期アルバイトと引換えに同観光地での旅行体験をする）の紹介媒体の読者層に、『LIFEin』の知名度はその上質さに比して不十分なものがあり、他方、役場は同媒体の取材・編集・刊行で人出が手一杯にある。このため移住促進媒体ではあるが配布が県外や、このような情報を必要とする人々に十分に届いていない。そこで、本年は、その改善として、広報媒体の広報という活動により、同誌の移住媒体の存在感を高めることとする。

また新たに南魚沼・教育班が形成された。同市には国際大学が所在する関係で日本語を母語としない学童が小学校に60名近くおり、これらわずか2年間で離日する（親が国際大学大学院・修士課程のため）の学童教育の実情について、教育委員会の支援の下に、これを調査し、今後のその改善を模索する。なお担当学生は日本語を母語としない学童への補習提供を事業としてきた学研での就労経験を持つ。

津南班

津南班は、同町に祖父母の実家（空き古民家）を持ち、幼少より津南町での農村生活の体験を持つゼミ生を中心に賛同学生を得て組織された。町の観光資源の知名度向上と、現在、空き家となっている祖父母の古民家を活動拠点として再利用することを目途として組織された。

観光庁より認定された雪国観光圏の中で、最も知名度が低いのが津南町である。隣接した十日町市が大地の芸術祭として有名であり、同芸術祭は十日町市・津南町により実施されているが、その知名度の拡大に余り寄与していない。また、同町に所在する清津峡はインスタグラムの影響で世界的な知名度を得ているが、津南の知名度向上には殆ど影響がなく、逆に周辺自治体からのアクセス観光地となることで、周辺自治体の観光資源であるがごとき広報状況となっている。同様に古くから「秘境・秋山郷」として名高い観光資源があるが、秋山郷は隣接する長野県栄村へまたがって存在しているため秘境としての観光資源の知名度は、秋山郷が栄村所在であるかのような形となっている。なお、津南町は自らを「温泉郷」として情報発信を行っている。

そこで知名度の発信戦略の現状の分析、今後の方向性の現地調査を実施するとともに、今後の活動拠点として中心となっている学生の祖父母の古民家の利用についての調査を行う。これにより持続可能な津南の情報発信とその改善を実施し、交流人口を拡大することが期待できる。

佐渡班

新潟県からの渡航観光地、もしくは新潟を經由観光地とした佐渡市の観光産業は、コロナ禍の三年間により甚大な被害を受けた。同じ佐渡島でも主要航路となる新潟市からの発着点を持つ両津港を拠点とした北部・中部に対して直江津－小木航路はコロナ以前から減便を余儀なくされ、南佐渡地域の観光被害はさらに深刻である。本来、首都圏からのアプローチで比較すると直江津－小木航路は北陸新幹線開通に伴い新潟－両津航路と同等か、場合によっては少し早く到着するようになっているが、その利便性の向上の社会への周知を図る前にコロナ禍となってしまった。

佐渡班は小木地区隣の羽茂地区に高祖父母の実家（築１００年の古民家）を持つゼミナールの学生の熱意から賛同者を得て組織された。同学生の祖父母は『佐渡新聞』の記者を長く勤め、一時は『読売新聞』の現地契約記者なども務めており、実母は佐渡汽船で務めていたこともある地域に深い縁を持つ学生である。このため、当初より域学連携事業の構築を目途として佐渡市役場関係者とオンライン・電話・メールを通じて協議を積み重ねてきた。この結果、

- ① インバウンド並びに首都圏からの集客を目途としたトレース動画（直江津－小木航路への誘客を図るべく、東京圏から同航路乗船から南佐渡観光機構観光案内所までの動線の再現映像の邦語／英語版）と南佐渡の歴史・文化の情景を紹介する映像作成を行うこと、佐渡の認知、航路乗客と観光集客向上を目指すこととしている。
- ② 羽茂地区に祖父母の実家を持つ学生の家には、両親が記者職とともに地元の旧家であったことから、小木港に係る歴史資料・記録史料が相当数あることが確認されている。これを利活用した南佐渡紀行の動画作成をつくる。

これは今後の必須の協議事項であるが、この祖父母の家にある歴史資料の整理・編纂・収蔵についての道筋（当該学生にも意欲があるが、遂行者については市の他部門との協議も必要と考える）を考える。

活動計画（活動目的を達成するための具体的な計画や方法、申請団体と連携地域・団体等がそれぞれ担う役割、過年度の活動実績や次年度以降の継続性等について記入してください。）

活動目的を達成するための具体的な手順や方法

南魚沼市

一昨年より同市内の五郎丸集落に古民家利用（旧校友宅、使用料が必要）の提供を受けており、これを拠点として活動が続けることが可能である。移住媒体の宣伝の宣伝については、移住媒体のInstagramアカウントは存在するが、その投稿等に手が回っていない。これを手伝うとともに、同誌で既報の移住者の取材掲載（その後談・続編）などを役場・関係者の許諾範囲で実施

する。

津南町

立ち上げとなる本年は、まず日程も確定した7月の第一次派遣では役場のブリーフィングと、さらなる関係者等との面識の拡大に努め、今後の利用が見込まれる古民家についての利用条件、補修必要箇所の生む等について調査する。なお当該古民家は、年間を通じて別荘的な利用をしており、冬季は近隣の親族による雪下ろしなどが行われている模様。

第一次派遣の成果を踏まえ、夏期の第二次派遣で、広報戦略をめぐる周辺自治体との齟齬とその背景を確認し（口約束も含む協定等の有無）、法定の雪国観光圏としての特例内でなしうることを考え、実施する。また、南魚沼・音楽班から始まった酒瓶楽器の利活用に伴う認知拡大について、津南町の酒蔵への参加協力の打診を試みる。

佐渡市

現在、5月以来、佐渡市とは域学連携事業の構築に向けて協議中であるが、活動目的で記したスキームについての連携団体等の間での合意は殆ど完了した。動画作成に向けて機材練習に取り組んでいる。当該学生の祖父母の古民家の利用の可能性をよく確認し、地元関係者（本取り組み代表）につき役場で調整をしていただいた。学生の派遣日程の調整は、役場サイドの調整事項を確定していただいた上で設計をしていただいた。なお、南佐渡に校友が経営する酒造場があり、その訪問日程を組むことにした。また、現地での映像事業者とした「さどやニッポン」の代表と意見交換を行った。これら周到な準備の結果、佐渡市からは域学連携の助成金を受けれることとなった。

申請団体と連携地域・団体等がそれぞれ担う役割

〔地域横断的な取り組み〕

一般社団法人 雪国観光圏

観光庁により公定・法定された雪国観光圏の機構・代表であり、観光系内における広域行政の調整と、法により認められた範囲での特例の実施についての相談・調整を実施する。井口氏自身は旅館等の宿泊施設を多数経営し、インターン受け入れも実施しているため相談案件は多い。

一般社団法人 佐渡観光交流機構

観光庁により公定・法定された「トキめき佐渡・にいがた観光圏」のとりまとめ機構である。観光圏内における広域行政の調整と、法により認められた範囲での特例の実施についての相談・調整を実施する。特に、同機構の南佐渡観光交流機構案内所・担当者とは現地情報についての相談事項が多い。

株式会社レルヒ（ぼんしゅ館〔新潟県内の地酒販売促進事業体〕経営）

同社は新潟県内の地酒全銘柄を扱い、その販売促進を県内拠点駅構内や、全国で実施している企画広報会社である。昨年よりゼミの酔音についての出演依頼があり、著作権問題がクリアとなったので、今秋に日本酒文化のイベント参加を要請されている。また、津南班・佐渡班の酒蔵との連携や販促イベント等についての相談・調整を担っていただく。

〔新潟県・南魚沼市〕

南魚沼市役所・U&I ときめき課・課長

移住促進媒体『LIFEin』の編集主体であり、ワーキング・ホリデー、地域おこし協力隊等の主管でもある。連携活動について、この科の全職員とはほぼ面識があり、庁内の部署や市内の民間団体などの紹介でお世話になっている。

一般社団法人 愛・南魚沼みらい塾

ゼミが提供を受けている五郎丸集落の古民家の管理・運営を行っている。また、総務省によるワーキング・ホリデーの実施主体である。倉田氏は地元の観光会社の理事でもあり、ツーリズムに関する相談先でもある。

一般社団法人 南魚沼市まちづくり推進機構

南魚沼市役所本庁そばの六日町駅構内に会議・イベント・作業用・コワーケーションのスペースを管理しているために利用する機会が多い。また、同市の街づくりに関する諸団体・個人に詳しいためその案内・紹介をお願いすることがある。

南魚沼市教育委員会・学校教育課学校指導係長

今年から新たに始まった日本語を母語としない外国人児童の調査に際してのデータや調査先の学校の案内をいただいている。また、音楽班が開発した酒瓶の楽器についての小学校教育での活用について協議中である（音楽班が卒業したのちの引継ぎが困難なために地元への還元を模索中）

株式会社エフエム雪国

六日町局の局長とコラボレーション番組の企画を構想中であり、同放送局の電波圏内という地元視聴者と、放送圏外の明治大学の学生との間での FM 放送を通じた関係人口交流となりうる番組企画とは何かについて、学生らと協議中である。また、音楽班の酒瓶楽器についての出演依頼が検討されている。

〔新潟県・津南町〕

津南町役場総務課、津南町役場観光地域づくり課 石沢久和

津南町は小規模自治体のため、調整や行政サービスに係る全体的な調整をお願いしている。

三箇地区都会との交流を進める会・会長・恩田稔

今回の一次派遣の具体的な受け入れ先で、既に実施してきた関係人口観光についてお話を伺う予定である。

〔新潟県・佐渡市〕

佐渡市地域産業振興課地域支援係

本取り組みについて、常時情報共有をしながら協議を進めている。

佐渡観光交流機構

佐渡市圏外・隣接市町村との問題点などの調査やツーリズム分野での調整が必要な場合の問い合わせ先である。

南佐渡観光交流機構案内所／佐渡市役所小木サービス・センター

映像取材に際しての関係者・集落の紹介についてはここが詳しいので案内を受ける予定。

過年度の活動実績

川島ゼミナールでは「里山と都会の情報コミュニケーション」を標語に地域活性化／地方創生に関する実習教育に20年来、取り組み、静岡県〔旧〕水窪町・青森県西目屋村・福島県北塩原村・福島県新地町・長野県小海町・富山県立山町と、大学ホームページ上でも多くの活動報告を実施してきた。

しかし、コロナ禍により3年間、中断を余儀なくされた。2022年より新潟県南魚沼市と同市が総務省ふるさとワーキング・ホリデーを実施するに際し、同役場担当部署（U&I ときめき課）及び同事業実施主体（愛・南魚沼みらい塾）と協議し、これをゼミ生派遣用に設定し、同役場が刊行する移住媒体『LIFEin』の編集のインターンシップとして、ワーキング・ホリデーそのものを紹介する特集の作製を実施した（以上は学部ホームページ参照）。

他方、南魚沼といえばコシヒカ리의名産地であり、また名水の地であることから八海山などの銘酒の地としても名高い。日本酒を中心とした醸造業は南魚沼市の地場産業の顔である。しかし、近年では若い世代の日本酒離れや種類の多様化に伴い、日本酒の国内市場は縮小の傾向にある。これに対処すべくローカル・クール・ジャパンを意識し、日本酒のブランディング活動を昨年からは始めた。

これが音楽班の結成という展開に至り、酒瓶を利用した楽器の作製に至った。酒瓶利用には、リサイクル等の3Rや、コロナ危機後高まった衛生管理から、実はガラス瓶の再利用が危機に瀕しているということ、ワイン等も層であるがガラス瓶は、そのビジュアル性により価値を高めていることの重要性といった視点も含まれている。音楽班の活動は、知財保護の観点から活動の表面化をこの3月までは控える運びとなった。

またこれらの活動拠点として川島ゼミナールは同市より古民家利用の提供を受けており、ワーキングホリデーに依存しない学生派遣を可能としている。これには同民家の利用（音楽の練習合宿・機材置き場）を通じて、古民家利用の問題点の洗い出しも兼ねており、古民家再利用の新しいモデルの提案を社会に広げたい。

次年度以降の継続性

観光圏、それ自体は認可されて間もなく、ようやく本格稼働に入ろうとしたところでコロナ禍に見舞われてしまい、コロナ明けの2022年から2023年にかけては、持続化給付金等の返済や、コロナにより一度、離れてしまった従業員の再雇用の困難などにより、地方の観光産業は再稼働段階と廃業／縮小段階が同時並行的に進んでいた。

そこへ2024年から人出不足の最中にインバウンドが巨大なオーバーツーリズムとなって地方観光産業を直撃することとなった。さらに本格化したインバウンド下の最初のウィンターシーズン、それは新潟の観光産業にとってハイシーズンになるのであるが、2025年冬にかけては記録的

な豪雪により、十分な事業の稼働が難しいハイシーズンとなった。

このように難航を余儀なくされる局面が続いてきたが、オーバーツーリズムとは言いながらインバウンドは1つの明るい兆しであり、今後はこのインバウンド方面を活動の内容に取り込みながら、目的として先に掲げた3つの関係性のより良い形成に資する活動を続けていきたいと考えている。

南魚沼班の取り組みは既に3年目となっており、古民家利用の便宜もいただいているので、今後も新たな地域課題の発掘と、この地が雪国観光圏の一拠点であることに鑑み、本年から新規に始めた同じ観光圏内の津南町との連携事例の開発もしくは、連携実績の積み上げを模索したいと考えている。

また本年は津南における学生の祖父母の実家である古民家利用については、私有財産であること、再来年には当該学生の卒業後の利用の困難化などから利用の継続については限度が出てくる。これを想定し、雪国観光圏が提供する短期インターン型観光地滞在サービスを津南町・南魚沼市のみならず他の雪国観光圏でも受けられることになっている。また他に同町内の受け入れ機関とも関係性を構築できている。

佐渡についても津南と同様の問題があり、本年、利用できた学生の高祖父母の古民家は、そのリノベの下準備手伝いを学生はしたので、次年度以降は宿泊業者に販売されることとなった。しかし、佐渡市では、2025年4月から学生受入れ用のゲストハウスを開設し、その利用について既に市当局より案内を受けている。

活動スケジュール

概 略

2024/6	Zoom 会議 佐渡班と佐渡市役場、南魚沼音楽班と株式会社レルヒ（湯沢町拠点）、南魚沼班と FM 雪国の番組企画会議
6-7 月	南魚沼教育班（1 名） 教育委員会より日本を母語としない学童についての調査について協力を得て、これを実施する。
2024/7/2-7/4	津南町派遣：津南班（6 名）、第一次派遣の実施 役場のブリーフィングと廃校利用の宿泊施設、今後の古民家利用の事前チェックと事前調査
2024/7/3-7/4	南魚沼ローカル・メディア班派遣 現地調査
2024/8/2-8	佐渡市第 1 次派遣
2024/8/27-29	南魚沼・音楽班、五郎丸にて演奏・ロケーション・SNS 作成
2024/9/24	南魚沼ローカル・メディア班派遣 エフエムゆきぐに番組収録
2024/10/13	日本酒リーグフェスタ 2024（新潟駅） 参加
2024/10/26-10/27	南魚沼ローカル・メディア班派遣 SNS メディア作成実習
2024/11/3-7	佐渡市第 2 次派遣

活動成果

活動成果は大きく言うと 2 つに分けることができる。1 つは実際に実践活動に関わった学生たちによる活動報告である。ここでは学生 4 班に及んだ学生活動の概略をまとめ、より詳しくは添付資料とする。もう 1 つは 教員自身が 3 地区の関係者と関わることで得た知見について簡単にまとめておくことにしたい。

南魚沼音楽班

これは 4 年生だけのグループによる活動であったが、すでに 3 年時に「酔音」と称する 酒瓶を活用した打楽器を、南魚沼市内の各酒造メーカーの理解と賛同を得て、作成し、その演奏活動や動画による公表については、著作権上のディフェンシブな活動を展開するためにも実用新案の特許を取得するというところまでの準備が、2024 年 4 月の段階で完成していた。その後 これら音楽館の学生たちは基本的には就職活動に専念をしつつ、4 年次の夏学期までには全員が就職活動に一つの区切りをつけて、南魚沼での本格的な演奏練習や活動を再開することとなった。新潟日報に紹介され、新潟駅構内での演奏活動や、シンポジウムなどへの学生の参加も実現できた。

しかし、学生たち自身がこの打楽器演奏を通じて社会に対して伝えたかった諸問題、日本人 ことに 若年層における飲酒文化の低減や、コロナ禍を転機としてガラス瓶の洗浄・再利用に対する衛生上の観点からの懸念が拡大し、酒瓶そのものの確保 も従前よりは難しくなっているという問題点、美味しい米作りが美味しい日本酒を作るという日本 食文化のエッセンスを有する地方新潟の価値の発信といった点については、より工夫をした情報発信を次の世代に継承することができやまいかということ进行を思案している。また、彼らが製作した酒瓶を活用した楽器については 南魚沼市教育委員会を通じた 小学校等での再利用の案もあり、今後の課題というよりは 今後に向けた展開を作ることができたと言える。

南魚沼ローカルメディア班

ローカルメディア 班は当初、南魚沼市が発行している 移住促進 媒体『Life In』という雑誌への編集の参画を想定していた。この参画はすでに過年度に実施済みのことであり、大学のホームページ等でも紹介をいただいている。2024 年度も同じような形でさらに進化した内容でこれに関わることを考えていたが、南魚沼市当局における媒体利用の方針転換によりこれが急遽実施できない事態となってしまった。一時は、困惑をしたが、教員・学生の機転により、南魚沼市に本局を置いている ローカル FM 放送局、エフエム雪国に提案および協議を行うことで、首都圏の学生から見た南魚沼市についての学生と地元の移住者の方との対談という番組企画を考え、これを 放送番組として 週 1 回 4 週にわたり放映していただくことに成功した。

この際、学生と対談した地元の移住者は、もともとローカルメディア班が南魚沼の魅力を発信するための SNS メディアのコンテンツ作成を行ってきたが、コンテンツ作成についての要領や技法を学ぶために南魚沼、魚沼と言った雪国 文化圏ではインフルエンサーとして有名な「ぬまめん」氏との対談を実現させることとなった。対談の内容は学生にとって 首都圏での就職と地方移住 や地方で働くということの意味や価値の相違と比較を、ほぼ同世代の目線です話合うことができ 非常に有意義なものであったと考える。

またこの代の取り組みは、当初予定していた市広報媒体への参画という機会を逸することになってしまったが、逆に 地域のコミュニティ FM ラジオや、 地域では有名なインフルエンサーと新しい関係性を構築することにより、ローカルメディア・スタディーズという 学生による地方との関係 交流人口の育成についての新しいモデルを作ることができたと考える。 このモデルは今後も 他の地域でも転用できるのではないかと思う。

津南班

すでに伸びたように 津南町のグループが形成されたのは学生の一人が津南町に高祖父母の古民家で幼少期を過ごしていたということに端を発していた。 この発起人の学生の思いは 幼少期津南町の広大な河岸段丘の農地に囲まれて育ったあの素晴らしい自然と里山の環境をより多くの人に伝えたいという強い思い から始まったものである。 こうした 学生の思いに対して 津南町役場 当局は極めて全面的な協力を実施していただき、 詳しくは学生報告に譲るが、総務課、観光振興課、農業部門、JA、町内 観光施設などでの非常に詳しいブリーフィングを行っていただくことができた。

また津南町に移住してきた若い世代の家庭訪問なども 実現し、地方移住や地方で暮らすということ を 肌を通じてとても良い実感を学生たちは受けることができたと言える。

しかし、その他方で、津南町が財政上、抱えている問題や、当初、彼らが利用やその若い学生や 若いツーリストへの紹介拡大をしたいと考えていたグリーンピア津南には、町営施設としての財政経営上の問題があり、さらにこれは今日のツーリズム 全てに共通することであるが、宿泊価格の高騰に伴い ツーリズムそれ自体が大学生にはちょっと手の届かない価格の世界になっているという現実を知ることとなった。

津南班は現役の古民家の再利用という宿泊形態を取ったが、昨今のレトロ 昭和文化ブームの一端に触れることになった。 また 首都圏の学生の場合、「地誌」という発想が極めて少なく、 自然地理的な特徴が文化形成に与える影響や特色というものに対する関心を持つ機械がほとんどないため、この方面の学習は今後 いよいよ若い世代には 必要な教養となっていくのではないかと思う。 地誌というのはかなり今の学生には想定外の教養だったようである。 この方面の許容はやはり 農業や JA の方による農産物の栽培・育成、防虫、摘果、収穫、集荷、発送に至る経緯を今回のブリーフィングでは非常に詳しく 丁寧に受けることができたので、そのようなプロセス それ自体が大きな発見であったと言える。

佐渡班

当初は、Best Access to Sado という インバンドを意識した外国人向けの 東京から佐渡への行き方を案内する動画作成に力を入れていた。 しかし、実際にこの動画作成のための準備を行っていく過程の中で、 次のような問題に直面することになった。まず 新潟経由なのか、直江津湖経由なのかということについては、 どちらがいいのかということを一概には言えないということ。 新潟への経路はいくつかの選択肢があり どれがベストとは言い難い ということと、 アクセス手段は非常に たくさんあるため 実情は複雑である。 つまり アクセスの中でどれがベストなのかということが決めがたいということが一つと、経路案内の動画作成に際しても、そもそも 経路上の案内掲示や 施設状況等が非常に 分かりにくいという現状が非常に明確に確認することができた。 その結果、どのような動

画作成をしても、帰って日本語に不慣れな外国人を混乱させてしまう 誘導動画にしかないという結論に至った。プロジェクトとしては未完で終わったということになるが、佐渡島のインバウンド観光が アクセス 誘導においては重大な欠点を持つということが明らかになった点で 非常に有意義な試みであったと考える。

もう一つの重要な取り組みが、古民家再生のための下準備の手伝いである。どのような古民家でもいわゆるリノベ や再生を行おうとした場合には一番最初の作業として、古民家内の様々な物品の片付けと整理が必要であり、業務委託として業者にやってもらうのではなく、学生がコミック 宿泊を楽しみながら整理作業を行っていくという小さな地域貢献を実施した。リノベ前の古民家宿泊というのは、その家屋のかつての生活者や環境周辺との地域文化に接するととても良い機会であり、近年、首都圏住民化し、首都圏をふるさととすることによる故郷喪失、あれは日本における伝統的、慣習的な故郷概念の喪失に対して、郷愁（ノスタルジー）概念の価値を 体感する得がたい機会でもあったと言える。

佐渡班は彼らが拠点とした羽茂地区の名産物である「おけさ柿」・ルレクチェルの 生産農家で、かつ移住者の方の自宅で非常に長い時間対談をする時間を頂いたので、都会での生活・労働と地方での生活・労働の価値の対比を詳しく伺うことができた。また佐渡班も柿や 洋梨の栽培 育成から敵かに至るまでの様々な作業や工夫と、摘果・収穫から市場発送までに必要な手順、特に柿の場合には 渋柿の渋抜きの経緯があり他の果物と市場競合する場合にはより多く工夫をしなければならない点があることなどを学んだ。1次派遣の意見 報告会では おけさ がきの レシピを考案したり、販売促進のための手法を学生から提案するなどして有意義な意見交換を過ごすことができた。

また 佐渡は金山が世界遺産になったということで周知されているが、金山 のみならず佐渡島の様々な地域伝承文化、鬼太鼓、文弥人形なども無形文化として評価されており、この点については 佐渡島で自らが地域で鬼太鼓を実践し、映像事業も 営んでいる「さどやニッポン」での研修を行うことができ、映像制作を通じた地域貢献について新しい知見を得ることができ、次年度に向けた新たな関係 交流人口のモデル 作成につなげることができると思う。

4つの活動のバックヤード 形成と支援を通じて

この1年間は学生の活動を通じて3つの自治体とそれに関連する諸団体と数多くのやり取りや 交渉 協議を行うことになった。そのことを通じて様々な知見を得ることができたが、この報告書では重要な一点について簡潔にまとめておこうと思う。

それは衝撃的な問題であったが、今日、人口減少問題に取り組む地方自治体の多くは、ことにコロナによる経済的なショックと、これに引き続く ウクライナ戦争による諸物資の入手困難や価格高騰等の混乱により、以前と比べてかなり余力がなくなってきたということである。もちろん、この余力はそれぞれの自治体の財政力により異なってはくるが、今までとは明らかに 全体として傾向が変わってきたという実感がある。

関係人口政策や交流人口の政策に関して言うと 優先順位は移住者の獲得と、移住希望者に対する懇切丁寧な対応、そして、すでに移住した人々に対するケアと連帯の形成に最優先順位が置かれており、もはや首都圏の大学生に 里山体験や地方社会学習のための研修をする余力はなく、それは実施したとしても、地方の自治体にはあまり メリットがなく、もっぱら大学や大学生にだけメリットがあることだという認識になりつつあるという現状である。もちろん このような認識は 地方社会の中でも個人差はあるが、趨勢としてはここで述べたような方向に動きつつあると感じている。

従って大学がもし、地域との連携ということを学生派遣を通じて実践しようとするのであれば、こうした点について一定の妥協点や、そもそも 大学としては教育の一環として行うので、学生教育のお手伝いをしていただけないかと相手に依頼をする態度と方法を持つことが非常に重要である。私はこの報告書の冒頭で、首都圏の若年世代から地方の社会や文化が持つ価値がその記憶や意識から消滅してしまうことの危機感を述べた。1 つの世代で消滅したものが次世代に継承されるということは 論理上、ありえない。この点に異を唱える 地方関係者はほとんどなく、むしろ賛同をしてもらえるだろう。しかし、地方は人材において決定的に足りておらず、そのために個々人の就業時間は長期化・多様化し、とにかく余力がないのである。従って、今後、地方連携を大学が行うのであれば、相当の事前に時間を設けて、受け入れ側にとって負担にならず、なおかつメリットを感じてもらえることができる学生のかかわり方を出す必要がある。

また、これは地方交流を通じた学生教育を長らく関わってきたものとして強く実感していることであるが、大学の側が事業として実施の段階から広報を織り込み、とにかく見栄えよく 広報 できるよという観点で関わってくる姿勢というのは、受け入れ側の地方自治体にしてみると透けて見えるものなのである。かつての自治体は付き合う余力や、そのような広報を通じて自身の自治体が発信されることにいくばかの価値を見出していたと言えるが、 SNS メディアが全盛から日常化していく今日の中にあって、「実施の段階から広報を織り込み」という姿勢には嫌悪感を示す地方関係者も少なくない。

地方の窮状もここまで来てしまうと、かつてのような研修という名の旅行のような地域との関わり方では歓迎をされるものではなく、大学として地方と連携することの意義や姿勢をしっかりと固めていかなければならないのではないかということを痛感した。さような意味では 本報告の一部で述べたが、今後、大学が地方創生 DMO の核として期待されている一面もあるので、リモートであったとしても多様な教員・学生の人材を地方の関係／交流人口の活動に提供しうる存在なので、今後この点についてなし得ることは何なのかということの考察を私は深めていきたいと思う。